

トラック 4-3

昔々、ひとりの貧しい男がいた。人が言うには、彼の貧しさは昨日今日の話ではなく、かなり前からだった。そういうわけでこの男は貧しさの中で暮らしていたが、或る日彼は、お祈りをしてもらうために、敬虔なムスリムに会いに出かけた。しかしそのムスリムは彼に言った。

「多分私はあるあなたにお祈りはしないだろう。だって、お祈りをしたらあなたは神様を敬わなくなるだろうよ。」

男がムスリムに再び会いに戻ってくるまで長い時が経ったが、そのムスリムは彼のために祈った。神は彼をお助けになるだろうが、そのためには、彼は道を歩く時に縄を持ってなくてはいけなかった。「出立して、お前が進む道で雌山羊を見つけるだろう。そうしたら捕まえなさい。それはお前のものだから」。

というわけで、彼は外出する時縄を持って行った。道で雌山羊を見つけたので、彼はそれを縄につないだ。後になって、この雌山羊は子供を産んで、彼に財産をもたらした。

日は過ぎ、その男はモスクへ頻繁に行ってお祈りをするのをやめた。シェイクは、その男の消息をつかみに行くよう命じた。彼の健康が心配だったからである。そこで、彼に何が起こったのか、病気になっていないかを見に人が遣わされた。シェイクは彼の消息を待ったが、男は静かに暮らすことが出来るように、巡礼に出発したと知らせた。実際には他のところに行ったのであるが。シェイクは「巡礼の後、彼の身に何が起こったのだろう」と思い、彼を探しに行くよう命じた。というのも、巡礼に必要な時間を越えていたからである。

最初のうちは、彼はどこにも見つからなかった。探索は続けられ、ついに彼は見つかった。彼は言った「私を放っておいてくれ。私にはもう時間がないんだ。私が関わっているすべてのことで、祈っている時間なんか無い。だから、私を放っておいて、自分たちのお祈りをしに戻ればいいのだ」。

実際は、彼が関わっていることなどほんの僅かだった。彼はひとつところに腰を落ち着け、夜のお祈りの時刻まで待って、幾らかの儲けと共に戻ることで満足していた。

日は過ぎ、人々は彼に言った。「もし、日の出、朝、昼、夜のお祈りをする時間が全然ないとしてもそれはお前の問題だ。お前が考えなければならない」。

或る日、この男の財産が底をついた。彼は財産をもう一度見出す方法を見つけようとしたが無駄だった。運が彼を見放したのだ。彼は結局はそうなったのだ。物事はそういう風に終わるものである。